

# 『色里三所世帯』の構造

## はじめに

井原西鶴が著した『色里三所世帯』（貞享五年六月刊。以下『三所世帯』と略す）<sup>①</sup>は、三巻四冊（各巻五章）で構成され、書名の「三所」という言葉から推察されるように、巻上に京、巻中に大坂、巻下に江戸の話を収録する。

その梗概は以下のとおりである。京の東山に二十四歳にして隠居した主人公外右衛門が持ち前の財力と性力にまかせて、数多の女性と関係を結び、その生活に飽きると、大勢の幫間を引き連れて、大坂、江戸に転居し、各地で放蕩の限りを尽くす。やがて性力が限界に達すると、吉原の近く小塚原に庵をこしらえ、後世を願うが、蔑ろにしてきた女性たちの執心にさいなまれ悶死する。本書は、いわゆる因果応報譚的な物語で

## 日比野 洋文

ある。

主人公の死という結末からすると、『三所世帯』はその原因となる主人公と女性たちの不穏な人間関係を描いた物語、といってよいだろう。しかし、本書の研究史を見るかぎり、主人公と女性たちの人間関係や、それが結末の死にどのように結びつくのかについては、今のところ言及されていない。その理由は、かつて本書が西鶴存偽作とされていたため、諸家の関心がもっぱら作者を突き止めることに向いていたことにあるようである。しかし、岸得藏氏が本書と他の西鶴作品を比較して、使用された語彙の共通性から、これを彼の作品であることを指摘した。<sup>②</sup>以後、本書を西鶴作品の一つとして見る向きが大勢を占めるようである。<sup>③</sup>

もっとも本書は、入念な検証の結果、西鶴作品の一つに数えられるようになったわけであるが、彼の数ある作品の中でも、注目を集めるよう

な作品でなければ、高く評価される作品でもない。本書が刊行された貞享五年には、町人物の第一作である『日本永代蔵』や、武家物の第二作である『武家義理物語』などの意欲的な作品が刊行されている。『三所世帯』は、旺盛な執筆活動の中で世に送り出された作品の一つであるといえる。しかし、本書は右の二作とは異なり、内容が「低調」とか「猥雑」であると評価されているように、評価や注目度については同列でない<sup>(4)</sup>。筆者も、本書に「低調」、「猥雑」などがあることを否定しない。

けれども、本書の作者と目される西鶴が、処女作『好色一代男』（天和二年刊）を創作したときからすでに、心理描写に優れた人物であったことは、諸家が認めるところである。ならば、『三所世帯』も、その内容に「低調」、「猥雑」などがあるであろうとも、結末で命を落とすことになる主人公と、彼を死に追いやることになる女性たちの互いの心理を何らかの方法で描き出しているはずである。その心理描写にこそ、本書の主題があり、西鶴作品としての一つの価値があるのではなからうか。そこで本稿では、主人公と、彼を死に追いやった女性たちの心理を手がかりにして、本書の主題とするところを検討したい。

## 一、「もてあそび」と「執心」

まず、主人公が命を落とす結末の場面を詳しく見てみよう。

俄に無常を覩じ、小塚原のくさむらにひとつのいほりをむすびて、

おのおの是に取こもり、後の世をねがふてみれ共、夢に太夫が見え、まぼろしに後家がたち、現に京の妾女共が顕はれ、うしろよりは大坂でだました娘が取付、まへより置ざりにせし女がしがみ付、次第に気力のおとろへるにしたがひて、毎日五人七人、女のかたちかきみて、外右衛門は殊に十一人の者共、よいかげんにうそいふたうらみ、其執心爰にかよひ、後には寝もせぬ夢におどろかされ、ひとりひとりくらいつめにやつれていつとなく息たえだえに、女ばうはいやじやいやじやと、いひ死、ひとりも残らず同じ枕に果ぬ。

主人公は、蔑ろにしてきた女性たちの「執心」によって命を落としたことが語られている。この「執心」に続く言葉に注目したい。そこには「其執心爰にかよひ」とある。これを素直に読めば、主人公と関係を持った女性には、執心が生じていたということになろう。

物語の冒頭で、主人公は「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入、金銀有にまかせて、酒淫・美色に身をかため」る人物と語られている。その主人公と女性の関係は、冒頭の言葉通り、主人公の財力や性力を担保にした「もてあそび」（巻上の二）であり、身勝手な要望を一方的に女性に提出し、対応を迫るというものである。たとえば、後家の髪を切った姿を面白がった主人公は、未婚の若い娘を集め、その親に金を払い、髪を切らせ後家姿に変えさせる、という具合である（巻中の二）。

本書と同じく、西鶴の浮世草子である『好色一代男』のとくに巻五以降には、主人公世之介と関わる遊女の美談が、多数収録されていること

は周知の通りである。一方、『三所世帯』に美談と呼べる話は一つもない。主人公は「思ひ入の太夫、千五百両にて」身請けしても、「是もあくまでのたのしみ」としか考えておらず（巻上の五）、その行為は「もてあそび」でしかない。女性の執心という感情は、主人公の「もてあそび」（要望）に対応する際に生じるものである。

さらに、こうした要望と対応という主人公と他者の関係は、始章から終章に至るすべてにおいて確認できる。換言すれば各章には、要望と対応という話の枠組みが存在するわけである。けれども、要望を提出する人物と対応に当たる人物は、主人公―女性に限らず、主人公―男性であったり、女性―主人公であったりと様々である。提出される要望の性質は、主人公や他者（女性・男性）ともに大半が性に関するものである。けれども幫間が主人公に「小判五両もらはば、宵より八つ門のあく迄かはらけを喰ていませう」（巻上の五）と、金銭の要望を提出する場面があるように、必ずしもその性質は性に限定されない。

執心が生じる・垣間見える人物についても、女性に限らず主人公であったりと様々である。さらに、執心の様相も様々である。たとえば結束で主人公が、三都の女性たちの執心が原因で女性を拒絶するようになり、挙げ句、命を落としたように、他者を肉体・精神的に消耗させる場合や、対照的に自己を肉体・精神的に消耗に追いつめる場合がある。また、執心が原因で消耗するものには、主人公・他者ともに、財力の場合もある。もっとも、主人公と執心の関わりについては、彼自身が「ただ人のも

てあそびは女道と思ひ入」れる人物であると語られているように、女色に執心（執着）する人物であるといえる。しかし、筆者がここで言う執心とは、欲求不満の意であって主人公の性格における特性とは意味が異なる。

では、話の枠組みを構成する要素に、様々な人物の組み合わせがある理由については後述するとして、各章における要望の提出と対応、登場人物の執心の様相をいくつか見てみよう。

#### 〈巻上の二〉

・主人公は屋敷の女性を集め女相撲を催す。勝者には褒美を与えると語る。――（要望）

・女性たちは褒美欲しさに本気で相撲を取るが、いずれも引き分けに終わる。――（対応）（執心）

#### 〈巻中の三〉

・主人公は大勢の女性と幫間を引き連れ、豪華な船遊びに興じる。

・主人公の様子を目撃した他の船に乗る男たちは、主人公と同じような遊びを一度はしてみたいと叶わぬ願いを口にしたたり、無分別な振る舞いに気分を害して、遊びを取りやめ金銭を置いて船を下りる。

――（要望）（執心）（消耗）

・一部始終を水底から見ていた龍宮の乙姫は、主人公の無分別な行為に激怒し、罰を与える。――（対応）（主人公消耗）

《卷下の四》

・色道の極意は吉原にあると思ひ詰めた主人公は、一々住まいから通うのが面倒になり、揚屋の座敷を一間借り切り、生活する。―（執心）

・主人公は、太夫を身請けして町屋に置くのはいつも人のすることだと語り、身請けした太夫の親方に経費を払い遊女屋に置いたままにして、今まで通り揚屋まで呼び寄せ遊興する。―（要望）

・太夫との生活は、にわかには儉約するわけにもいかず、財力が残りわずかとなると、主人公は遊女相手に討ち死にしようと思ひを決める。

―（対応）（消耗）

右の通り各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、かつ当該場面に関与するいずれかの人物に「執心」が垣間見えることが共通している。どうやら、『三所世帯』は「執心」という負の感情が主題の書、と言ってよさそうである。もともと、登場人物が提出する要望の多くが、性に関するものであることから、物語の性質を端的に言い表すならば、作中では用いられていないが、情念と言ったほうがより適当かもしれない。

さて、『三所世帯』の各章には、要望と対応という話の枠組みが存在し、その五つの話（五章）によって、上・中・下（京・大坂・江戸）の三巻は構成されている。この五章から成る各巻にも、各章に話の枠組みが存在するように、能や浄瑠璃の五段構成を模したかのような展開を辿ると

いう、言わば話の大枠が存在する。

各巻における話の展開の大枠と、その内部で各章の話の枠組みが果たす役割を次に確認しよう。

## 二、各巻の内部構造

西鶴作品と能・浄瑠璃の関係については、山口剛氏が『好色五人女』を構成する五巻と、各巻の五章が、いずれも能の五段構成をうつしたものであることを指摘しておられる。<sup>⑤</sup>本書の五章から成る三巻についても、山口氏が指摘するところと同様である。ただし本書の場合、各巻の第一章から第五章の同数の章（各巻の第一章どうし、第二章どうし、という具合）の話の内容を比較すると、共通する部分が存在するという特徴がある。

能・浄瑠璃の各段の構成については、浄瑠璃の概説書『竹豊故事』に、「五段二綴るハ能の番組二同じ。初段ハ脇能、式ハ修羅、三八葛事、四ハ脇所作、第五ハ祝言也。大鉢是ニ表せる物也」と、二種の芸能で共通することが記されている。<sup>⑥</sup>本書の各巻五章の展開についても、概ねこの言葉のごとくであって、それを前述の要望と対応という話の枠組みを用いて実現している。

各巻の話の展開と、その共通する部分の要点を次に取り上げる。なお、先に取りあげた巻上の一、巻中の三、巻下の四については割愛する。

## ○第一章

### 〈巻中の一〉

・主人公は召し連れた幫間たちに、一ヶ月間の色狂いの成果を尋ねる。

―（要望）

・幫間の一人が、自身の性力の強さと、女性を足腰立たぬようにしてきたという手柄を語り、褒美に紫の褌を所望する。―（対応）（要望）

（女性消耗）

・話を聞いた主人公は、幫間に世間の淫乱を知らないと言。そして、善吉という幫間の名を挙げ、彼は幾度となく所帯を持つが、その都度、夜の情事に女性が疲弊して離縁している。以降、女人形を間に合わせにして、その他は我慢していると語る。―（主人公対応）

（幫間執心）（女性消耗）

### 〈巻下の二〉

・江戸へ到着した主人公は、すぐさま現地の幫間に、女性を催促する。

―（要望）

・幫間は主人公に我慢を促すが、引き下がらない主人公に、女性に不自由する江戸の男たちの暮らしぶりを見せる。―（対応）

・やもめ暮らしの男たちは、女性不在を嘆き苦悩し、性力を有り余していることを口々に言う。―（執心）（消耗）

・江戸の実情を察した主人公は、旅の疲れもあり、当夜の色遊びを断念する。―（消耗）

（※第一章は、登場人物の性力の強さが語られることが共通している。

また、浄瑠璃の初段には、事件の発端や世界観が表されているように、第一章にも同様のことが表されている。巻上が女性が男性不足を嘆く世界、巻中が男性と女性の性力が衝突する世界、巻下が男性が女性不足を嘆く世界である。各巻の話は、第一章で表された世界観のもと展開していく。）

## ○第二章

### 〈巻上の二〉

・主人公の屋敷に暮らす非番の女性たちは、桜戸の奥に閉じ込められる。

・女性たちは男日照りを嘆き、淋しさから一人の女性が、せめて男の袖を吹いてきた風に当たろうと言う。―（要望）（執心）

・女性たちはみなで縁側に立ち並び、美しい裸体をさらすが、その様子を見る人はおらず、虚しく行為を終える。―（対応）（消耗）

### 〈巻中の二〉

・後家の性に関する逸話を聞いた主人公は欲情し、小宿に頼みこみ、人目を忍び後家と呼び寄せる。―（執心）（要望）

・主人公を相手にした後家たちは、性力の強さに圧倒され、正気を保って帰る者はいなかった。―（対応）（消耗）

・気を良くした主人公は、振袖を着た若盛りの後家を探せと周囲に命じる。―（執心）（要望）

・振袖を着た髪切り姿の後家など減多におらず、機転を利かせた幫間  
は、美しい娘を集める。娘の親に主人公の要望を話し、財力で合意  
を取り付け、娘たちを後家姿にする。―（対応）（女性消耗）

〈巻下の二〉

・主人公は座敷を一日借り切って、その表を通る女性たちを誘い込み  
情事に及ぶ。

・主人公の色遊びに誘われた女性の一人が、主人公が他の女性に掛か  
り切りになり、自身の相手をしないことに不満を言う。

・主人公と幫間が不満を言う女性の相手をする、女性は満足して、  
気に入った幫間に心付けを渡し帰路に就く。―（女性消耗（金銭））

・主人公は江戸に若盛りの男たちを送り込んで、女性たちの相手をさ  
せたならば、どんな商売よりましだろうと思案する。しかし、この  
商売も寿命が縮まることだろうという結論に至り、座敷を引き上げ  
る。―（主人公消耗）

（※第二章は、主人公の行為が原因で女性が消耗することが共通して  
いる。）

○第三章

〈巻上の三〉

・主人公が屋敷の女性たちと湯浴みをする姿を二人の男性がのぞき見  
る。

・男性の一人は、たとえ責め殺されても、あの中へはまっつて女たちを

自由に出来るのであるならば、思い残すことはないと言う。―（要  
望）（執心）

・主人公の女性への無遠慮な行為に、二人の男は齒ぎしりするが、ど  
うすることも出来ず虚しく帰路に就く。―（消耗）

・一連の出来事を聞いた人々は心を浮つかせ、死期が迫った老人も説  
法を聞くような穏やかな状態ではいられなくなる。―（対応）

〈巻下の三〉

・太夫との関係が思い通りにならず、不満を持った主人公は、揚屋の  
亭主を呼び出し、一座を三十日ずつ買い切る約束をする。―（要望）

（執心）

・亭主は喜び、主人公を福の神のごとく崇め、聞かれもしないのに、  
太夫たちの優れた内情を語る。―（対応）

・太夫の内情を聞いた主人公は心を躍らせ、遊び相手を求めるが、位  
の低い遊女を相手にするのは嫌で、揚屋から帰る夜道の途中、太夫  
の姿を想像し性力を発散する。―（消耗）

（※第三章は、主人公が神仏に例えられるほどの豪勢な色遊びに興じ  
ることが共通している。）

○第四章

〈巻上の四〉

・主人公は屋敷の女性たちに、自分に似た男子を出産したならば、そ  
の母親を本妻にし、子どもに家督を譲ると語る。―（要望）



・屋敷には主人公の他に男性がいなくても関わらず、女性たちは主人公に似ても似つかない男子を出産する。原因を詮索すると、芝居見物の際に目にした役者にほれこんだ、その一念によるものであった。

―（対応）（執心）

・主人公は素人女の執着に嫌気がさし、女性たちを他所へ嫁に出す。

―（対応）（消耗）

#### 〈巻中の四〉

・欲求不満を募らせた主人公は、諸国男執行に回る女性たちを見つけ、そのいたずらっぽい目つきや腰つきに心引かれる。―（主人公執心）

・欲求不満を募らせた主人公は、諸国男執行に回る女性たちを見つければ幕の内へ引き込む。―（執心）

・主人公と女性たちは情事に及ぶ。女性たちは強力な性力を有していたため、主人公は音を上げて許しを請う。―（主人公要望）

・女性たちは主人公に構わず行為を続ける。そして女性たちは我々の一生の想い出に飽きるまで付き合ってくださいと語ると、その言葉

を聞いた主人公は、困惑し意識を失う。―（女性対応）（女性執心）

（主人公消耗）

（※第四章は、主人公が女性との関係が原因で消耗することが共通している。）

#### ○第五章

#### 〈巻上の五〉

・莫大な財力を誇る主人公は、鳥原の幫間たちを前にして望む金銭の額を述べよと語る。―（要望）

・幫間たちはそれぞれ苦しい懷事情を語る。そして、望み通りの金銭が頂けるならば、身体を張った無謀な一芸を披露すると語る。―（対応）（執心）

・主人公は幫間たちに望み通りの金額を授けるが、鳥原の内情を知ると当地での遊びが面白くなる。―（対応）（消耗）

#### 〈巻中の五〉

・主人公は女郎を毎日、一人づつ揚げて契りを結ぶ。

・吉原の恋塚という三分取りの女郎は、主人公の遊びの真意を詮索して、契りを結ぼうとしない。―（対応）

・主人公は大願があつて逢いたい恋塚を口説くが、彼女は承知しない。主人公は一日一人の色遊びの計算が合わなくなるので、間に合わせに宿の仲居女を相手にする。―（執心）

・主人公は色里の女性を一人残らず相手にすると、素人女にかかり切りになる。後には少しずつ興ざめして、遊びを取りやめる。―（消耗）

（主人公消耗）

#### 〈巻下の五〉

・性力が限界に達した主人公は、幫間たちに、再び生まれ変わるならば美しい女性に生まれ、世間の男性の性力を枯渇させたいと願いを語る。―（要望）

・無常を痛感した主人公一行は、庵をこしらえて籠もり、後世を願うが、かつてもあそんだ女性たちの執心にさいなまれ命を落とす。

― (対応) (執心) (消耗)

(※第五章は、主人公が他者を嫌気して遊興を取りやめることが共通している。)

右に取り上げたように、各巻各章の話の展開を比較すると、いずれも共通する部分が認められる。各巻は同一の構想に基づいて、適宜、主人公と登場人物の関係が設定され、構築されているといえる(共通する部分が意味するところについては後述)。

そして、能・浄瑠璃の段構成に序破急(導入・転換・終結)の概念があるように、各巻における話の展開も、同様の概念のもと構成されているようである。すなわち序破急に例えるならば、主人公ないし他者の有り余る性力と、異性への執心が語られる第一章の話が「序」(導入)である。他者が自己の執心、ないしは主人公の執心によって消耗する第二章の話が、「破一段」(展開)である。主人公の放蕩を目撃した他者が、執心を口にしながらも羨望を抱く、ないしは主人公が他者への執心を口にしながらも羨望を抱く第三章の話が、「破二段」(展開)である。主人公が他者の執心、ないしは自己の執心によって消耗する第四章の話が、「破三段」(展開)である。主人公が他者や自己の執心を嫌気して、「もてあそび」を一時、ないし永久に停止する第五章の話が、「急」(終結)である。

このように、話の展開を図式的にみると、浄瑠璃ならばヤマ場(「破二段」)に相当する第三章を境にして、執心によって消耗する人物が、他者から主人公へとおおよそ変化している(ただし、巻下のみすべての章において主人公が消耗しているが、この点については後述)。本書が、もてあそんだ女性の執心によって主人公が命を落とす因果応報譚的な物語であることを鑑みれば、こうした各巻の話の展開も、因果応報の道理を表現したものののだろうか。けれども各章独立した内容であるように、主人公を要因とした他者の消耗と、他者を要因とした主人公の消耗の間に、因果関係は確認できない。

もっとも、第三章を境にした前後の章には、因果関係はないにせよ、話の展開に共通する部分があり、且つ、主人公と他者の執心と消耗の関係が、対照的に設定されている。しかも、そうした話の関係が確認できる章と章の組み合わせには規則性があり、第一章と第五章、第二章と第四章にのみ確認でき、その他には確認できない。さらに、それらの話の関係は、いずれも前述の要望と対応という話の枠組みの内部に位置している。先に各章の話の展開については確認したが、各巻内部での第一章と第五章、第二章と第四章における話の展開の共通する部分と、登場人物の対照的な関係という観点から、今一度、話を見てみよう。巻上を例としてその要点を次に取り上げる。なお、巻中・下の各章については、紙幅の都合、比較を割愛する。



○第一章と第五章

〈巻上の二〉

・主人公は屋敷の女性を集め女相撲を催す。勝者には褒美を与えると言ふ。――（要望）

・女性たちは褒美欲しさに本気で相撲を取るが、いずれも引き分けに終わる。――（対応）（執心）

〈巻上の五〉

・莫大な財力を誇る主人公は、島原の幫間たちに望む金銭の額を述べ、よと語る。――（要望）

・幫間たちはそれぞれ苦しい懷事情を語り、要望通りの金額が頂けるのなら、身体を張った無謀な一芸を披露すると語る。――（対応）（執心）

・主人公は幫間たちに望み通りの金額を授けるが、廓の内情を知ると島原も面白くなる。――（対応）（主人公消耗）

（※主人公が他者（屋敷の女性・幫間）へ私財（褒美・金銭）を提供することが共通している。ただし、巻上の一では褒美ほしさに行動する他者（屋敷の女性）が体力を消耗するが、一方で巻上の五では他者（幫間）の発言から廓の内情を知った主人公が精神を消耗する。）

○第二章と第四章

〈巻上の二〉

・女性たちは男日照りを嘆き、淋しさから一人の女性が、せめて男の

袖を吹いてきた風に当たろうと言ふ。――（要望）（執心）

・女性たちはみなで縁側に立ち並び、美しい裸体をさらすが、その様子を見る人はおらず、虚しく行為を終える。――（対応）（消耗）

〈巻上の四〉

・屋敷には主人公の他に男性がいないにも関わらず、女性たちは主人公に似ても似つかない男子を出産する。主人公が原因を詮索すると、芝居見物の際に目にした役者にほれこんだ、その一念によるものであった。――（対応）（執心）

・主人公は素人女の執着に嫌気がさし、女性たちを他所へ嫁に出す。

――（対応）（主人公消耗）

（※屋敷の女性たちが男性に憧れを抱くことが共通している。ただし、巻上の四では、屋敷の女性たちが男の袖を吹いてきた風に裸体をさらすが、何も起こるはずなく、精神を消耗する。一方で巻上の五では屋敷の女性たちは、関係を持ったことがない役者の顔にうり二つの男子を出産し、その奇妙な事実を知った主人公は困惑し、精神を消耗する。）

右の通り、巻上における第一章と第五章、第二と第四章を比較すると、二つの話の間に因果関係は確認できない。けれども、話の展開に共通する部分があり、且つ、主人公と他者の執心と消耗の関係が対照的に設定されていることが確認できる。こうした話の関係は、巻中と巻下それぞれの第一章と第五章、第二と第四章にも確認できる。つまり、三巻すべてにおいて確認できるのである。このすべてという事実からすると、話

の共通する部分や、対照的な設定が、各巻内部の当該箇所、意図して設置されたものであることは確かであろう。

確認できる位置が、前述の序破急の「序」と「急」に相当する第一章と第五章、「破一段」と「破三段」に相当する第二章と第四章の組み合わせに限定される理由は、やはり、各巻が能・浄瑠璃の五段構成を模したかのような展開を辿ることにあるのだろう。

今一度、格段の構成要素を簡単に確認すれば、浄瑠璃ならば初段が事件の発生、二段が事件の展開、三段が事件のヤマ場、四段が事件の新展開（解決への道筋の提示）、五段が事件の解決といったところである。五段構成とは例えるならば、三段を頂点とした山のような形状であって、初段と二段が山頂（三段）へと向かう登り側の麓（初段）と中腹（二段）であって、四段と五段が下り側の中腹（四段）と麓（五段）である。

本書の各巻はこうした浄瑠璃の五段構成を模したかのような構成であり、かつ第三章を軸に第一章と第五章、第二章と第四章の話の一部分が対照的に設定されている。つまり対照的な話の設定とは、事件の発生と解決というような、緊張感の等しい話（山に例えるならば同一高度）の間に出現する仕組みなのである。

一方、各巻の第三章については、本章がヤマ場であることを示すように、主人公のもてあそびが頂点に達する。第三章では、遊興に耽る主人公の姿は、神仏に例えられ、その様子を目撃した他者は、身勝手に振舞う主人公に対して憤慨すると同時に、羨望を抱く（巻下では、主人公

が吉原の太夫を自由に出来ず立腹し、揚屋の亭主が語る太夫の姿に主人公が羨望を抱く）。こうした神仏に例えた比喩表現や、他者から主人公に怒りという鋭利な感情が向けられる場面は、他章では確認できない特徴である。これらは、本章が話のヤマ場（転換点）であることを暗に示しているのだろう。

また、第三章が話の境（転換点）であることを暗示するかに、「川」（巻上）、「船（舟）」（巻中・下）という水に関連する場面が、本章にのみ確認できる。『俳諧類船集』には「川」の縁語に「境」と記載されている<sup>7</sup>、言わば第三章とは、第一・第二章と第四・五章の話をつなぐ分水嶺なのである。巻中・下の「船（舟）」についても、主人公が乗船し川を移動するように、その出現は巻上と同様の暗示的な意味があるとみてよいだろう。

以上のように、第三章を話の境（転換点）とみた場合、おおよそではあるが、前半を主人公が原因で他者が執心を抱え消耗する話、後半を他者の執心によって主人公が消耗する話と区分できる。言うなれば執心の蓄積（前半）と、噴出（後半）である。そして、その前後の個々の話には因果関係はないにせよ、展開に共通する部分があり、且つ、主人公と他者の執心と消耗の関係が対照的に設定されている。こうした各章の話の関係（構造）は、結末で主人公がもてあそんだ女性（他者）たちの執心にさいなまれ命を落とすように、彼の身に不幸な末路が訪れることを予感させるものであると言えよう。

### 三、物語の全体構造

各巻の内部は序破急のような三段構成（導入・転換・終結）であり、かつ第三章を転換点として、前後の話の一部分（執心による他者と主人公の消耗）が、対照的に設定されている。換言すれば、中央に位置する第三章を境に、主人公が優位から劣位に転じるわけである。こうした三段構成と、話の対照的な設定は、各巻内部だけでなく、巻上・中・下の物語全体を通して存在する。

前述したように、巻上は男性不足を女性が嘆く世界、巻中は男性と女性の性力が衝突する世界、下巻は女性不足を男性が嘆く世界である。その三つの世界（三都）で活動する主人公は、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」れる人物であると紹介されている（巻上の二）。その人物像から各巻を図式的に見れば、男女の性力が衝突する世界（巻中）を境にして、主人公に好都合な世界（巻上）から、不都合な世界（巻下）に転じるといえよう。

その各巻の展開（同数の章）を比較すると、提出される要望や対応の性質には共通性が存在したが、同時に各巻の内部構成と同じく、主人公と他者の執心と消耗の関係が、対照的に設定されているようである。今一度、この観点から第二章を例として、その要点を次に取り上げる。なお、他章においては紙幅の都合、比較を割愛する。

#### 〈巻上の二〉

・主人公の屋敷に暮らす女性たちは、男日照りを嘆き、淋しさから一人の女性が、せめて男の袖を吹いてきた風に当たろうと言う。――（要望）（執心）

・女性たちはみなで縁側に立ち並び、美しい裸体をさらすが、その様子を見る人はおらず、虚しく行為を終える。――（消耗）

#### 〈巻中の二〉

・主人公を相手にした後、家たちは、彼の性力の強さに圧倒され、正気を保って帰路に就く者はいなかった。――（主人公執心）（女性消耗）

#### 〈巻下の二〉

・主人公の色遊びに誘われた女性のうちの一人が、主人公が他の女性に掛かり切りになり、自身を放置したことに不満を言う。――（執心）  
・主人公と幫間が不満を言う女性の相手をする、女性は満足して、気に入った幫間に心付けを渡し、帰路に就く。――（女性消耗）（金銭）  
・主人公は江戸に若盛りの男たちを送り込んで、女性たちの相手をさせたならば、どんな商売よりましだろうと思案する。しかし、この商売も寿命が縮まることだろうという結論に至り、座敷を引き上げる。――（主人公消耗）

各巻の第二章を比較すると、男日照りを嘆く女性（巻上）、後家（巻中）、放置された女性（巻下）というように、男性関係を持たない女性が登場することが共通している。ただし、巻上では男日照り（主人公不在・執

心)が原因で女性(他者)が精神を消耗する一方、巻下では放置されたことに不満(執心)を述べる女性(他者)に対応した主人公が精神を消耗している(女性も金銭を消耗)。巻中については、主人公に対応した女性(他者)が、彼の強靱な性力(執心)が原因で、心身ともに消耗するように、主人公のもてあそびの強度が巻上と巻下に比べて高く設定されている。

右には、各巻の第二章を例に取り上げたが、他章についても主人公と他者の執心と消耗の関係は、第二章と同様に対照的に設定されている。その関係は次のとおりである。

〈第一章〉巻上―他者消耗、巻中―他者消耗、下巻―他者・主人公消耗

〈第三章〉巻上―他者消耗、巻中―他者・主人公消耗、巻下―主人公消耗

〈第四章〉巻上―他者・主人公消耗、巻中―主人公消耗、巻下―主人公消耗

〈第五章〉巻上―他者・主人公消耗、巻中―主人公消耗、巻下―主人公消耗

各巻の同数の章における消耗する人物を比較すると、物語が巻上から巻中、巻下へと進展するにつれて、他者と主人公(もしくは他者単独)から、主人公単独(もしくは他者と主人公)に変化している。そして詳細については割愛したが、巻中の各章ではいずれも主人公のもてあそびの強度が、巻上と巻下の同数の章に比べて高く設定されている。つまり、

三巻の同数の章における話の関係は、各巻の話がその内部において中央の第三章を境(頂点)に、主人公が他者に対して優位から劣位に回る三段展開であったのと同様であるといえる。

また、先述したように、各巻の第一章と第五章、第二章と第四章には、話の展開に共通した部分があり、且つ、主人公と他者の執心と消耗の関係(主人公の優位(第一・二章)と劣位(第四・五章))が対照的に設定されていた。こうした各章の話の関係は、各巻の内部だけでなく、巻という区分を越えて確認できる。巻上の二を例に挙げると、本章は巻上の四に加えて、巻中の四・巻下の四との間にも、話しの展開に共通するところと、主人公と他者の執心と消耗の関係が対照的に設定されているのが確認できる、というわけである。その巻上の二を基点とした場合を例として、話の展開の類似点と、対照的に設定された主人公と他者の関係の要点を次に取り上げる。なお、巻上の二と巻上の四の関連については、本稿第二章ですでに指摘したことであるから、その比較については割愛する。また、本稿の第一・二章において、『三所世帯』各巻各章の話しの展開の要点を取り上げたが、そこでは紙幅の都合により、各巻を横断する話題の共通点と、登場人物の対照的な関係までは、網羅できていないことを断っておく。

〈巻上の二〉

・女性たちはみなで縁側に立ち並び、美しい裸体をさらすが、その様子を見る人はおらず、虚しく行為を終える。―(女性消耗)

#### 〈巻中の四〉

・欲求不満を募らせた主人公は、諸国男執行に回る女性たちを見つけ、そのいたずらっぽい目つきや腰つきに心引かれる。――（後にこの場面に登場する女性が原因で主人公消耗）

#### 〈巻下の四〉

・主人公は、必要経費を払い身請けした大夫を遊女屋に置いたままにする。今までの勤め通り大夫を揚屋まで呼び寄せ、その道中を見物した人たちに、その途方もない座敷遊びをあこがれさせる。――（後にこの遊びが原因で主人公消耗）

こうした巻という区分を横断した各章の関連については、右に取り上げた巻上の二と巻中の四・巻下の四だけでなく、各巻すべての第一章と第五章、第二章と第四章を比較した場合に確認できる（それらについては紙幅の都合、比較を割愛する）。つまり、各章間の対照的な話の設定（主人公と他者の対照的な関係）とは、各巻の内部だけでなく、巻という区分を越えて作中全体で確認できるように、全方位的な仕組みであるといえる。

そしてさらに、各巻の内部では中央に位置する第三章が話の転換点であったように、物語全体でも中央に位置する巻中の三が、話の転換点に位置づけられているようである。先述したように巻中の三以降の話には、そのすべてで主人公が他者ないし自己の執心によって消耗する姿がみられる。こうした話の性質の変化の一つを取り上げただけでも、巻中の三

が物語全体の転換点であることは明らかだろう。もともと、この事実だけをもってして、巻中の三が物語全体の転換点であるというわけではない。

叙述の煩雑化を避けるため、前章では指摘しなかったが、巻中の三には、本章が物語の転換点であることを暗示する「竜宮の乙姫」が登場する。彼女は、女性をもてあそぶ主人公の姿に激怒し、彼から「りんのたま」（性力の源の意）を取り上げて、竜宮へと帰っていく。すでに指摘されているように、この場面は謡曲『海士』における海女が龍宮から宝珠を取り返すというエピソードを逆設定したものである<sup>8)</sup>。

竜宮の乙姫の登場は、話の展開からすると、一見、唐突である。しかし、この中巻第三章以降、彼女の言葉通り、主人公の性力や財力を担保にした他者への優位は崩れ、彼は劣位に立たされていく。したがって、巻中の三における『海士』の一場面を逆設定した場面とは、言わば世界の秩序が逆転する場面であって、物語の転換点なのである。

そもそも、乙姫のような主人公よりも上位に位置する神仏のごとき存在は、主人公自身が神仏に例えられることがあっても（巻上・中・下第三章）、他に登場しない。加えて主人公の肉体（性力）を消耗させる人物は、物語全体を通して乙姫が最初である。当該章以前にも、主人公が消耗する姿は巻上の第四・五章にも確認できるが、それらはあくまで精神の消耗であって、彼の肉体（性力）には変化がない。さらに、本書三巻の中でも、巻中が「もてあそび」の頂点であると先述したように、当



該章の前後には、主人公が数多の後家を相手に正氣を失わせるほどに追い込む話（圧倒的優位・巻中の二）と、諸国を男修行に回る女性を相手にした主人公が、死を意識するほどに追い込まれる話（圧倒的劣位・巻中の四）が配置されている。巻中の三と、その前後章における他章とは質を異にする話の設定からも、当該章が物語全体の転換点であることが読み取れよう。

以上、本書は巻上・中・下の三巻によって、序破急（導入・転換・終結）を構成し、中央に位置する巻中の三を境に、物語は主人公の優勢から劣勢に大きく転換する。それは、能・浄瑠璃の五段構成を模したかのような展開を辿る各巻の内部（五章）も同様である。各巻内部にも序破急のような区分が存在し、破の二に相当する中央の第三章を境に主人公の優劣が転換する。物語を構成する最小単位である各章の話については、いずれも主人公と他者の、要望と対応という話の枠組みと、執心による消耗によって構築されている。そして、これらの個々の話は、執心という負の感情を軸にして、複雑多岐に関係し合っている。つまり、物語全体、各巻、各章は入れ子構造であると同時に、網のような関係を構築しているのである。こうした話全体の構造は、『俳諧類松集』において、「執心」の縁語に「深い」という言葉が記載されていることや、作中に出現する「りんき」（巻上の二）の縁語に「丑の刻参」、「執念」（巻中の三）の縁語に、「蛇」という言葉が同書に記載されているように、主人公に向けられた他者の負の感情の深さ、絡みつくさまを立体的に表現しよう

としたものなのだろう。

#### 四、三都の配置

ところで、『三所世帯』と題する本書には、巻上に京、巻中に大坂、巻下に江戸の順で三都が配置されているが、作者はなぜ、この順で三都を配置したのだろうか。またなぜ、巻上の京と巻下の江戸の話には、主人公と他者の関係の優劣が対照的に設定され、巻中の大坂は主人公のもてあそびの頂点（転換点）として話が設定されているのだろうか。

このような構成・設定に至った発想の根拠を、西鶴の他の浮世草子における三都への認識を手がかりにして、少しばかり検討してみよう。

まず、京と江戸における話が、対照的に設定された根拠については、『好色一代女』の京と江戸を舞台にした「国主の艶姿」（巻一の三）に手がかりを求めることができる。<sup>9)</sup>そこでは、二つの都市の女性の特徴が次のように比較されている。

東そだちのすえずえの女はあまねくふつつかに、足ひらたく、くびすぢかならずふとく、肌へかたく、心に如在もなくて、情けにうとく、欲をしらず、物に恐れず、心底まことはありながら、かつて色道の慰みにはなりがたし。女は都にまして何国を沙汰すべし。

色恋の相手として江戸の女性は好ましくなく、それに比べて京の女性は全国随一であると力説されている。



この認識からすると、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」れる主人公が登場する『三所世帯』の始まりの地が京に設定されているのは、少なくとも江戸であるよりも自然であると言えよう<sup>11)</sup>。

さらに、『好色一代女』には右に取り上げた他にも京の色恋の事情がうかがえる場面がある。「石垣恋崩」(巻五の一)では、「殊京都は、女自由なるに」、粋な大尽が目利きを誤ったがために、老いた主人公一代女が思わぬ幸福を手に入れる。

「石垣恋崩」の一場面と『三所世帯』を比較すると、京に住居する主人公外右衛門も、「二十四人色作りの女にたはぶれ、我ままなる遊楽」をするように(巻上の一)、行為の印象としては「女自由なる」の言葉に合致する。

一方、江戸における色恋の事情については、『好色一代女』には先に取り上げたほかに、それに触れた場面は見当たらないものの、『三所世帯』には当地の京とは対照的な事情に触れた場面がある。たとえば、「江戸は女のすくなき所を今覚て」(巻下の一)とか、「所ならひにて、男世帯を人もとがめず」(巻下の三)といったように、江戸は男性労働者が多く在住する一方で、女性が少ない土地であるという。すなわち、京と江戸の色恋の事情を比較すると、前者が女性に事欠かない、後者が事欠くという点で、対照的な土地であると言えよう。

大坂については、京や江戸と比較して、色恋の事情を表現した場面を西鶴の他の浮世草子の中から見つけることは出来なかった。しかし、色

恋の事情ではないが、大坂の特徴は、『好色一代女』の「濡間屋硯」(巻五の四)に、「万売帳、なにはの浦は、日本第一の大湊にして、諸国の商人、爰に集りぬ」(巻五の四)と表現されている。『三所世帯』にも同様に、「此所日本ならびなき津なれば、大方の事に目をおどるかすべき事にはあらねど」(巻中の三)とある。西鶴作品からは、大坂が全国から商人と物資が集まる経済と物流の中心地という認識があることが読み取れる。

加えて、本書作中では大坂の生活環境が次のように語られている。

此所(大坂四つ橋・筆者注)にかり座敷して、色男寄会世帯も珍らし。京より薪やすし、米自由にして、酒からく、延紙は吉野より手廻しよく、伽羅は堺より取よせ、南請にふんどしの干場もよし。爰ぞ住べき所と、恋の入江に碇をおろしぬ。(巻中の二)

この一文からは、大坂の生活環境が充実していることと、それが色遊びに興じる主人公に好都合であることが読み取れる。

そもそも主人公は、京から大坂に移動する理由について巻中の一の冒頭で「難波の冬籠り、新しき鰻汁ゆかし。京まで魚荷のはこぶもおもはしからず」と語るように、食物(物流)の存在を挙げている。主人公が大坂を好色活動の場に選定したのは、当地に在住する女性の存在が理由の第一というわけではない。

こうした、経済・物流や生活環境という観点から『三所世帯』における江戸、京と大坂の土地柄を比較すると、江戸については「人は商売の

利徳を望み爰（江戸・筆者注）にく、だりけるに、此大臣は金すてにはるばるの御下向ありとは、よもやしるまじ」（巻下の三）と語られている。

この一文からは江戸の経済の成熟度が大坂・京と比べて劣ることが読み取れる。京については先に挙げたように、巻中の大坂の場面で、「京まで魚荷のはこぶもおもはしからず」（巻中の二）とか、「京より薪やすし」（巻中の二）と語られているように、物流や生活環境は大坂に劣る。すなわち、『三所世帯』における大坂という土地は、経済・物流や生活環境という点で、三都の中で頂点に位置づけられていると言える。

以上、『三所世帯』や、他の西鶴作品における京と江戸の対照的な色恋の事情に注目すれば、主人公と他者の関係がそれぞれ対照的に設定された巻上と巻下の場面が、京と江戸であることは、自然な選択であるといえよう。巻中の場面が大坂であり、話の頂点（転換点）と設定されていることについては、色恋ではなく経済・物流、生活環境の観点であるが、当地が本書において全国の頂点と認識されていることからすると、これも自然な選択であると言える。ましてや主人公は、『三所世帯』という書名のとおり、三都で世帯を構えるわけである。その書名からすれば、西鶴が三都（三巻）における話の対照的な関係を構築する際に、主人公が世帯を構える土地の色恋の環境や事情だけでなく、経済・物流、生活環境の特徴についても少なからず考慮したはずだろう。先に挙げた三都の経済・物流、生活環境を比較した言葉は、それを意味しよう。したがって、京・大坂・江戸の配置順序は、本書が三巻によって三段構成

（導入・転換・終結）を取るように、その構成によくなじむ配置であると言える。

## 五、主人公の人物像

さて、主人公の人物像に話を戻そう。結末において、性力が限界に達した主人公は、過去の全盛を「一生色道の達者、われにまされる人、世にあらじ」と振り返る。たしかに、かつての主人公は並外れた性力と財力を有する好色家であり、「諸分は京の嶋原に身をなし、口舌は大坂の新町に魂をくだき、はりつよき所を江戸のよしはらに見初」たという経験からすれば（巻下の三）、その自己評価は過大ではないだろう。しかし、他者を「もてあそび」、執心を生じさせ、ときにその執心によって消耗する人物が、「色道の達者」と呼べるような人物であったのだろうか。

執心に対する主人公の反応に注目すると、性力が限界に達した後の彼は、かつてもてあそんだ女性の執心にさいなまれ命を落とすように、無力をさらす。一方、「色道の達者」であったときには、他者ないし自己の執心により消耗しながらも、色遊びを継続している。言い換えれば、全盛時には執心に対処できていた、ということになる。

ところが、主人公の執心への対処方法に注目すると、彼の自己評価とは乖離した一面が見えてくる。それは執心・性からの逃避と、その失態の弁解である。

たとえば、巻上の四の末尾では、屋敷の女性たちが歌舞伎役者の顔にうり二つの男子を出産すると、主人公はその執心の深さを嫌気して「皆々かたづけ」る。

巻上の一から、右の巻上の四における屋敷内部での美女たちとの遊興については、浜田泰彦氏が「中国の天子の例に倣ったものである」ことを指摘し、巻上の四における主人公を驚かせた不測の事態には、次のように言及しておられる<sup>1)</sup>。

こうして「天子」の理想を追って真似事を重ねていた外右衛門は、思わぬ形で美女たちにはしごを外され、「皆々かたづけて」、岡崎の後宮を解散する決意を固める。西鶴は、「爰が分別所」と呼びかけたものの、「天子」の資格を失った（放棄した）外右衛門には忠告も空しく、さらに大坂（巻中）、江戸（巻下）へと女色三昧の旅を継続することになった。

浜田氏は、巻上の四において主人公が「天子」の資格を失った（放棄した）と指摘しておられるが、この身辺整理は、執心・性からの逃避と言い換えることができる。そして逃避した主人公は、続く巻上の五の冒頭において、先の苦い体験から「物にはよいかげんのなき物なり」という認識を示し、「遊興のうはもり、嶋原の女郎まして又なし」と思いう立ち、太夫・天神を取りそろえた盛大な遊興をする。言うなれば主人公は、「ただ人のもてあそびは女道と思ひ入」という人格の回復を図るのである。しかし、こうした認識や行為は、執心・性から逃避したこと

についての弁解と取れなくもない。

全盛時の主人公は執心に遭遇したとき、遊興を取りやめ逃避的な態度を取り、直後にその失態を弁解するかのように盛大な遊興をする。作中には、こうした主人公の性質を暗に言い表したかのような次の一文がある。

惣じてままならぬ世の事、帥になればかならず金なし。前かたなる太郎殿には、金のある徳にて、うとき座敷もかしこく見えける。此大臣は諸色の得道して、しかも金捨るに極ての大さわざ（巻下の三）色道に未熟な者の遊興の質と比較する形で、色道の達者であるという主人公の遊興の質の高さが語られている。

しかし、先に述べたように、「色道の達者」であるという主人公も、「太郎殿には、金のある徳にて」の例えのごとく、執心・性から逃避した直後に、持ち前の性力・財力を用いた盛大な遊興をすることによって、先の失態を隠匿している節がある。主人公が「色道の達者」と称するようにな、「東山の大臣」（巻上の五）とか、「色道大和尚」（巻中の二）などと、たびたび形容されることを鑑みれば、失態を隠匿するかのような盛大な遊興は、自尊心を守るための行為であると言ってよいだろう。

もっとも、主人公の自尊心とか人間性は、性力と財力が限界に達し、「色道の達者」たる資格を喪失した後でも変わらない。それは、主人公が「一生色道の達者、われにまされる人、世にあらじ」と振り返った直後から、命を落とすまでの場面から読み取れる。むしろ、財力・性力という、言

うなれば装飾物を喪失した姿が描かれた当該場面にこそ、主人公の心理がもつともよく表れていると言えるかもしれない。主人公が命を落とすまでの場面については、先に取り上げているが、今一度、主人公の心理という観点から見よう。

主人公は、かつては「色道の達者」と思っているほどであったが、性力が枯渇すると一転して「さりととはさりととは是ほどまできらひにもなる物かな」と女性を拒絶するようになり、自身もその思考の様変わりになるほどである。京から召し連れた幫間たちも、主人公と同じく無分別な放蕩があだとなり性力が枯渇し、過去の行為を後悔する。すると主人公は、弱り果てた幫間たちに、「世にはしたい事しかねて死ぬる人もあるに、皆々往生の覚悟をせよ。うごうごと長生しても、此事やみては生がひなし」と虚勢を張る。自身は「二たび生まれかはらば、美なるおんなに生を請て、世間の男に上手をしかけ、腎虚させてあそぶべきねがひなり。たまたま男に生れて、さりとては女のたはむれにあきはて」たと語る。そして「浮世の所帯やぶり、われわれなり」と身の上を悟ると、主人公一行は、吉原の近く小塚原の草むらに庵をこしらえ、そこに籠もり極楽往生を願う。しかし、その願いは叶わず、彼らはもてあそんだ女性たちの「執心」にさいなまれ、「女ばうはいやじや」とわめき、息絶える。性力が限界に達した主人公は、幫間たちを前にして、「女のたはむれにあきはて」たと強弁している。この発言は、「一生色道の達者」と思っているが、い上がっていた過去や、女性を「きらひ」になったという直前の発言と

は対照的であり、性力が限界に達してしまったことを弁解するかのようであり、苦し紛れの感が漂う。庵に籠もるという選択も、女性を「きらひ」になったことを思えば、当該人物からの逃避と見えなくもない。そして女性の亡霊が現れると、彼は「女ばうはいやじや」とわめくが、この発言は迫り来る死を前にして、遂に本音が漏れたのだろう。

主人公の半生については、森田雅也氏が「外右衛門の人物形象は、京都・大坂・江戸と好色遍歴を重ねた往生ながら、『好色一代男』のように永遠の性の謳歌と言うような前向きなものではな」と指摘している。<sup>12)</sup>

一方、ダニエル・ストリューヴ氏は、「好色の失敗者という解釈も可能であろうが、むしろ好色を果てまで味わい経験した者とも言える」と述べ、「外右衛門こそが好色の達成者だと見られよう」と指摘している。<sup>13)</sup>

両氏の見解は対照的であるが、主人公の半生には、一方ではなく、この二つの面があるのではなからうか。

ストリューヴ氏が指摘しておられるように、たとえば主人公は京を後にする際、島原の太夫を世話女房にし、その生活を「あくまでたのし」んだと語られているように、当地での「好色を果てまで味わい」尽くしている。しかし、主人公が太夫を請け出すに至った経緯は、幫間たちの執心を垣間見たことがきっかけで、島原の内情を知り、当地での遊びが面白くなかったことにある。したがって、森田氏が指摘しておられる

ように、主人公の好色遍歴は、「前向き」なものとはいいたろう。前掲の浜田氏も、「達成」とは程遠い経験をたどった」と指摘しておられるように、主人公の好色遍歴には、執心・性からの逃避という消極的な選択を自己弁護によって隠匿しようとする部分が存在する。

主人公の好色遍歴の表面部分に注目すれば、彼は「色道の達者」と言えるだろう。しかし、それは虚勢によって保たれていたと言ってよいだろう。

## おわりに

本稿では、『色里三所世帯』の主題とするとすると、主人公の人物像を検討してきた。

本書には、主人公の「もてあそび」が原因で、他者が「執心」を生じさせる様子が映し出されていた。そして「執心」が主人公に絡みつく様と、「色道の達者」として振る舞う彼が、称号に反して女性と、その彼女たちの執心から逃避する様子が映し出されていた。もともと主人公は、逃避という事実を隠匿するかのように性力と財力を用いて活動を継続していた。しかし、その主人公も、始章で「此水（性力の意）へりては取かへしのなかりき」と語られているように、性力が限界に達すると、もてあそんだ女性の執心によって命を落とす。まさに、始章で語られた懸念が現実となるのである。本書の主題は「執心」とであると言ってよいだ

ろう。

本書は数ある西鶴作品の中でも、「低調」、「猥雑」と評価される作品である。たしかにそうした印象を受けるところがあるのも事実である。しかし、西鶴は本書において「執心」という感情に着目し物語を描いている。しかも「執心」の感情を軸に、各巻各章の話が複雑に絡み合う構造を構築し、主人公に対する他者の執心の深さを表現している。ここに彼の心理描写と、創作技術の高さの一端がうかがい知れよう。

しかし当時の読者が、本書における創作技術をどのように評価したかについては疑問がある。本書は西鶴の没後（元禄六年没）に、『好色兵揃』（元禄九年刊）として改題・再編され刊行されている。再編の結果、『好色兵揃』では、『三所世帯』にあった話の構造が崩れている。この再編は、当時の読者が『三所世帯』の話の構造を評価しなかったことを意味するのか、それとも西鶴著述の新作として世に送り出したいというような書肆側の事情があつて、内容に手を入れたのか、筆者は今のところ、この疑問に対する答えを出せていない。小説史における『三所世帯』の話の構造の評価については、筆者の今後の課題としたい。

## 〔付記〕

本稿は、東海近世文学会五月例会（第二六九回）における発表を基に成した。その際に、貴重なご指導を賜りましたこと、記して感謝致します。

注

- (1) 本文の引用は、富士昭雄訳注『決定版対訳西鶴全集 一七』（二〇〇七年 明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。岸得蔵『色里三所世帯』（『仮名草子と西鶴』所収 一九七四年 成文堂）
- (2) 近年では、上阪彩香氏が西鶴作者説を肯定している。（『西鶴遺稿集の著者の検討―北条団水の浮世草子とその比較分析』（『計量文献学の射程』所収 二〇一六年 勉誠出版））
- (3) 暉峻康隆『好色盛衰記』と『色里三所世帯』（『西鶴評論と研究下』所収（一九五〇年 中央公論社））
- (4) 山口剛『西鶴について』（『山口剛著作集第一巻』所収 一九七二年 中央公論社）
- (5) 本文の引用は、霞亭文庫所蔵本に拠った。
- (6) 本文の引用は『俳諧類船集索引付合語篇』（一九七三年 般庵野間光辰先生華甲記念会）に拠った。
- (7) 注1同書
- (8) 本文の引用は、富士昭雄訳注『決定版対訳西鶴全集 三』（一九九二年 明治書院）に拠った。旧字体は適宜、現行の通行字体に改めた。
- (9) 『三所世帯』を含め、西鶴の好色物に分類される浮世草子作品の多くは、京を物語の出発点としている（『好色一代男』、『諸艶大鑑』、『好色一代女』など）。物語が京から始まるのは通例と言ってよいかもしれない。
- (10) 浜田泰彦『色里三所世帯』の再検討―「天子」を真似る外右衛門―（『鯉城往来』19 二〇一六年一月）
- (11) 森田雅也『色里三所世帯』と京都・大坂・江戸―西鶴と貞享期の読者の三都意識をめぐって―（『日本文藝研究』五五卷（四）二〇〇四年三月）
- (12) ダニエル・ストリューヴ『西鶴晩年の好色物における「男」の姿と語りにおける機能』（『アジア遊学』195 二〇一六年三月）